

## 平成30年度の学校評価

本年度の重点目標	「未来を生き抜く力を育てる」 ・生徒の限りない可能性を引き出し、夢と希望を語る学校の実現を目指す。 ・自他ともの尊敬を教え、自ら誇りと自信に満ち、他を大切に思いやる豊かな人間性を育てる。 ・自らの志を立て、グローバルな社会を豊かに生き、明日の日本を支える有為な人材を育てる。		
項目(担当)	重点目標	具体的方策	評価結果と課題
総務部	・PTA、同窓会、中学校との連携推進	・PTA活動の充実 ・中学生体験入学、情報提供(学校案内パンフレット等)の充実	・学年行事やPTA主催の行事に、保護者が気持ちよく参加していただけるよう案内や駐車場などに配慮した。今後は80周年行事に向けて、同窓会との連携強化に重きを置きたい。
教務部	・授業力の向上	・教員相互の授業見学の推進 ・授業評価アンケートの実施 ・公開授業の実施	・授業評価アンケート結果を教科会で検討し、授業改善につなげることができた。今後は年間を通じての授業見学や授業アンケートの複数回の実施検討したい。
進路指導部	・自発的学習を通して「気づき」を促すエンカレッジ運動の推進	・面談指導の充実 ・自習教室の充実 ・難関大学別特別講座の実施	・担任が面談指導を行いやすいように進路シラバスを充実させた。 ・業後の補習を一部自習形式として自習時間を確保した。 ・必要に応じて難関大学別特別講座を実施した。
生徒指導部	・社会人基礎力及び自己指導力の育成 ・いじめの早期発見、適切な事案対応	・風紀委員会活動の活性化 ・共感的人間関係の育成 ・アンケート(年間2回)の実施 ・いじめ対応の組織的な体制確立	・風紀委員会が中心となり、地域の清掃や交通安全指導を実施した。また、人権の啓発活動にも主体的に取り組むことができた。 ・アンケートに記述欄を新たに設けたことで、具体的な生徒情報が把握でき、早期の対応を実践することができた。
特別活動部	・相互理解と自己理解力の育成	・HR活動、行事、部活動、委員会においての人材の育成とエンカレッジ運動の推進	・学校行事(主に西祭)や部活動を中心にエンカレッジ運動を推進し、生徒の人格形成、リーダーシップの育成の一助とすることができた。生徒会活動として震災募金の継続、エコキャップ運動を実施した。 ・ボランティア活動を広めることが課題である。
保健厚生部	・心身両面における自主的な健康管理能力の育成	・的確な健康情報の提供と指導 ・保健室来室者に対する「エンカレッジ運動」の推進	・生徒保健委員会を活用し、熱中症やインフルエンザ等のタイムリーな情報提供及び予防啓発を行った。保健室来室者に対しては頑張りを認め、自己肯定感が高まるよう声かけを行うとともに関係職員にも働きかけた。
教育相談	・教育相談活動の充実とエンカレッジ運動の推進	・情報の共有化による教育相談委員会の充実 ・スクールカウンセラーの効果的な活用	・学校不適応や悩みを持つ生徒に対して、早期発見や早目の対応を心掛けることに重点を置き、相談活動を行った。月2回の相談委員会を通して情報の共有を徹底でき、スクールカウンセラーに繋ぎ、専門的な視点から生徒支援を行うことができた。
図書研修部	・教員研修の連携と充実 ・充実した図書館活動の展開を実施	・研究授業、授業見学への積極的な取り組みの推奨 ・生徒主体の委員会活動の推進、館内整備の推進と蔵書の充実	・継続して2年目の学級経営力の向上研修会を企画し、経験の浅い教員が積極的に学ぶ機会を提供できた。 ・ビブリオバトルや委員会活動を活発にして、生徒が行きたくなるような魅力ある図書館にすることができた。
SS事業部	・課題研究の指導体制の強化と研究レベルの向上 ・新仮説に基づいた評価法の開発 ・地域とのSSH成果共有の推進	・教員による課題研究の指導力向上研修を実施し、生徒の研究レベルを向上させる。 ・第Ⅱ期SSHの新仮説を検証できる客観的な評価法を開発する。 ・パンフレットの新規作成とHP等で成果発信を強化する。	・昨年度に続き、課題研究委員会主催の教員研修会を実施し、指導力の向上を実現するとともに、卒業生等を活用したTA(ティーチングアシスタント)と相まって研究レベルが向上した。 ・評価法は第Ⅰ期のものを修正・運用し、第Ⅱ期の新仮説を検証している。来年度以降、精度と客観性の向上を図っていく。 ・日本赤十字豊田看護大学・豊田工業高校・トヨタ技術会と連携したSSH成果発表会を開催し、地域とのSSH成果共有を拡大させることができた。課題研究の成果物(論文・ポスター他)をHPにアップするなど情報発信も強化できた。
第1学年	・生徒の把握と初期指導の徹底 ・生徒が満足感、成就感を得られるような支援と指導の充実 ・実社会の出来事と、学習している内容との関連づけ	・面談や学習記録表などを通じて担任が指導・支援するとともに、学年全体でも情報を共有し、支援する。 ・教師と生徒及び生徒間における好ましい人間関係を構築する。 ・新聞の切り抜きなどを通して、時事問題についても考えさせる。	・学習記録表による個別指導や学習時間の把握を通して、個々の生徒を適切に支援することができた。得られた情報は、担任会、学年会を通して教員間でも適切に共有し、指導できた。 ・学習記録表の提出を通じて、教師と生徒の間に相談できる人間関係ができた。そこから得た情報をもとに、人間関係のトラブルの芽を摘み取るような指導もできた。 ・課題研究や新聞の切り抜きを通じて、社会に目を向けるよう指導できたが、今後は自ら探究する姿勢を身に付けさせたい。
第2学年	・目標や適性に応じたきめ細かい指導の継続 ・国語、数学、英語の基礎学力の完成 ・高い目標の設定と主体的な努力の支援	・面談等を充実させ、学年団で情報を共有した上で指導する。 ・授業や補習に意欲的に取り組ませ、得意科目の伸長と不得意科目の克服に努めさせる。 ・将来を具体的に思い描かせ、先を見通した上で今必要なことを考えさせる。	・学習記録表を使用した継続的な個別指導、担任面談、学年主任面談等を通して、個々の状況に合わせた指導をした。また、指導方針や個別対応について、学年団全体で共通理解をし、効果的な支援を行うことができた。 ・特に10月から12月を受験指導上重要な転換期と位置付け、「受験に向けての意識改革」をスローガンに掲げた。担任、教科担当者が連携し、生活、学習状況の改善、進路意識の向上を図ることができた。
第3学年	・学校を生活の中心とする「西高第一主義」の徹底 ・学力や進路希望に応じたきめ細かい指導 ・高い目標設定と実現に向けての支援	・授業や補習、学校行事、課題研究に意欲的に取り組ませる。 ・面談や声かけを積極的に行い、学年全体で情報共有を図る。 ・常に高い目標と努力の精神をもたせ、実現のための道筋を示す。	・多くの生徒が「西高第一主義」を意識し、意欲的に取り組めたが、まだ努力の余地がある生徒もいた。 ・担任の先生を中心に繰り返し面談を実施し、担任会や学年会、hirobaTの学年ページを活用して情報共有できた。 ・特別講座の開講や添削課題、レベル別補習を実施し、生徒のやる気を刺激しながら努力させることができた。
総合評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業改善を進めるため、授業評価アンケートの検討や授業研究などを行い、授業の活性化を図ることができた。</li> <li>・グローバル社会で自信をもって生きる生徒の育成を目指して、進路指導やSSH事業の充実を図ることができた。</li> <li>・エンカレッジ運動を、生徒指導、特別活動、相談、面接指導などで積極的に推進することができた。</li> </ul>		